

「光の過剰」

クリスマス照明が美しい季節になった。年ごとに工夫を凝らされて、最近ではまさに光の芸術と呼ぶにふさわしい。

ただ一つ残念なのは、年間いつでも街には華やかなライティングがあふれているために、せっかくの効果が半減してしてしまうことだ。それゆえクリスマスだという特段の感激も覚えない。たとえば、うちの近所の庶民的な中華料理店はいつも豆ランプで店頭を飾っていて、毎日がクリスマスみたいな感じなので、その数軒先のイタリアン・レストランの瞬くクリスマス・ツリーも登場の迫力がいまいちになってしまう。

谷崎潤一郎の『陰影礼賛』を引くまでもなく、薄暗がりには日本の伝統的な美意識を支えるものであったはずなのに、二十一世紀の現在、東京ほど光を浪費している場所はないのではあるまいか。夜の銀座や新宿ほど眩しく瞬いている街並は、パリやニューヨークにも見あたらない。

光に慣れてしまった私たちが失ったものは何だろう。それはたぶん闇に対応する能力、いやそれ以前に闇そのものだ。

一九九八年の暮れ、ケニアに行った。暑い中のクリスマスツリーが何か奇妙なナイロビから自然保護公園まで遠出して一泊。個室は林の中に建てられたバンガロー風の小屋で、まったく明かりがない。夜中に目覚めると、あたりは正真正銘の真っ暗闇だった。そのとき私は、自分がそれまで闇というものを知らなかったことに気がついた。本物の闇は胸にのしかかるほど重く、ことばでは表せないほど攻撃的で浸食性のあるものなのだ。たぶん動物としての本能的な恐怖と一体になっているせいだと思う。

とても寝つくことができず、辺りに猛獣が出没する危険があるからと禁じられていたにもかかわらず、ほとんど腹ばいで戸口を探り当て、薄めにドアを開けた。外はうっすらとした星明かりで、私はやっと息をつくこと

「光の過剰」

ができ、また手探りでベッドにもぐり込んだのだった。

朝起きて見たら、ベッドの脇にマッチ箱が置いてある。ああ、夜中に目覚めた時のためだ、と分かったが、寝る前にはそれがあることすら気がつかなかった。

最近の芸術活動にも、そんな闇を意識した作品がある。瀬戸内海の直島にあるベネッセハウスに設けられているのは、真っ暗な部屋。入ると何も見えない。ひたすら目が闇に慣れるのを待つばかりである。早い人だと三分くらいで、ボンヤリ、ほんとにボンヤリと、同室の人間の輪郭が浮かんでくる。そして少しずつ見えるようになるのである。私は最初、照明を操作しているのかと思ったが、そうではなくて、こちらの視力が回復、いや増強するのを待っていただけなのだ。

この十一月に見た『ヒロイン』というコンテンポラリー・ダンスもかなりの衝撃だった。冒頭から真っ暗な中に投げ込まれた観客がじっと耐え、やがて闇に慣れた眼が舞台の上にダンサーの姿（といっても、ほとんど輪郭だけ）を見分けるまでに約二十分。ケニヤやベネッセハウスでの経験がなければ、腹を立てて中座したところだ。もっとも暗すぎて客席の通路を歩くことは不可能だったが。

劇場芸術もそうだが、古い文学作品なども光の乏しさを考慮に入れて読み直すと、また感じ方が変わることもある。『椿姫』の最初の愛の語らいは、じつにテーブルの上のロウソク一本の明かりの中。現代人なら、暗さにおびえて愛の語らいどころではない。

【追記】

長唄の『二人椀久』は遊蕩にふけて勘当になった商家の息子、椀屋久、兵衛

「光の過剰」

が、放浪して恋い焦がれる遊女の幻を見、かつての歓楽を想うという内容で、舞踊曲としても人気高い。

そのなかに、恋人たちの会話で、

男「月の漏るより闇がよい」

女「いや いや いや こちや闇より月がよい」

男「お前もそうか」と寄り添えば…、

というのがあって、私は 聴くたび、さつき闇って言ったくせに、と思うのだが、ある時、隣席の友人にその疑問を投げかけたところ、古典芸能をよく識る彼女は、こともなげに「優柔不断な男なのよ」と言い、さればこそこの落ちぶれようと、私は妙に納得したものだ。

昔の秘め事は、明るくてもせいぜい月明かりだったのだ。

初出 北國新聞「北国抄」二〇〇六年十一月

ホームページ掲載 二〇二三年十一月二三日